

トピック

D

中学生・高校生の 学校運動部活動の活動実態 ーガイドライン制定後の変化ー

愛知東邦大学 経営学部 准教授 大勝 志津穂

スポーツ庁は、2017年度より運動部活動の在り方について検討会議を実施し、2018年3月に「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を策定した。その後、2018年10月に「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」フォローアップ調査が、都道府県、政令指定都市、市区町村の各教育委員会と学校法人に対して実施された。

この報告書によると、中学校を対象とした方針の策定状況において、「既に策定済み」と回答した割合は、都道府県教育委員会が70.2%、政令指定都市教育委員会が60.0%、市区町村教育委員会が37.0%、学校法人が22.9%となっている。高校を対象とした方針の策定状況では、都道府県教育委員会の61.7%、政令指定都市教育委員会の36.8%、市区町村教育委員会の15.7%、学校法人の15.8%が「既に策定済み」と回答している。このように、中学校と高校では、ガイドライン策定状況に差がみられる結果が示され、中学校においてガイドラインを制定する学校が多い状況がうかがえた。

そこで、本稿では2017年の「子ども・青少年のスポーツライフ・データ」で明らかにした学校運動部活動の活動実態と同様の分析を行い、2019年のガイドライン制定後の運動部活動の実態把握とともに、変化を検討した。

D-1 ガイドラインの内容

「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」では、適切な休養日や活動時間について以下の具体的な数値が示されている。

- 学期中は、週あたり2日以上の休養日を設ける。(平日は少なくとも1日、土曜日及び日曜日は少なくとも1日以上を休養日とする。)

- 1日の活動時間は、長くとも平日では2時間程度、学校の休業日は3時間程度とし、できるだけ短時間に、合理的でかつ効率的・効果的な活動を行う。

(下線部は著者による)

D-2 学校運動部の活動状況

(1) 学校運動部活動の所属状況及び実施種目

本稿では、中学校・高校の学校運動部活動に所属する生徒を分析対象とし、表D-1に中学生と高校生の運動部活動の所属率を示した。

中学生全体の所属率は61.8%となり、高校生では45.4%となった。この値は、2017年の結果より低下して

おり、運動部活動に所属する生徒が減少している傾向がうかがえた。男女別に所属率をみると、中学生では男子が71.1%、女子が50.6%と20ポイントの差がみられた。高校生では、男子が54.2%、女子が36.0%となり、男女による差とともに、高校生女子の運動部活動所属率の低さが顕著にみられる結果となった。学年別の傾向をみる

と、中学生では各学年とも6割程度の所属率となったが、高校生では、2年生から所属率が低下し、3年生では3割の所属率となった。

次に、表D-2に所属する運動部活動の種目を示した。中学生ではソフトテニス(軟式)、バスケットボール、陸上競技、サッカー、野球が上位となり、高校生ではサッカー、野球、バスケットボール、バドミントン、テニス(硬式)となった。

(公財)中学校体育連盟(以下、中体連)では、ソフト

テニス、バスケットボール、卓球、陸上競技、サッカーの順に加盟生徒数が多かった。(公財)日本高等学校体育連盟(以下、高体連)と(公財)日本高等学校野球連盟(以下、高野連)の加盟生徒数をみると、サッカー、野球、バスケットボール、バドミントン、陸上競技の順に加盟生徒が多かった。本調査結果と各連盟の上位種目には、一部順位が異なる場合もみられるが、ほぼ一致している結果が示された。

【表D-1】学校運動部活動の所属状況の推移(中学生・高校生)

中学生							
		2017年			2019年		
		n	所属(%)	無所属(%)	n	所属(%)	無所属(%)
全体		537	65.7	34.3	565	61.8	38.2
性別	男子	298	74.2	25.8	308	71.1	28.9
	女子	239	55.2	44.8	257	50.6	49.4
学年	1年生	183	69.9	30.1	189	64.6	35.4
	2年生	187	66.8	33.2	195	56.9	43.1
	3年生	167	59.9	40.1	181	64.1	35.9

高校生							
		2017年			2019年		
		n	所属(%)	無所属(%)	n	所属(%)	無所属(%)
全体		476	48.1	51.9	509	45.4	54.6
性別	男子	239	60.7	39.3	262	54.2	45.8
	女子	237	35.4	64.6	247	36.0	64.0
学年	1年生	172	53.5	46.5	180	61.1	38.9
	2年生	149	55.0	45.0	163	43.6	56.4
	3年生	155	35.5	64.5	166	30.1	69.9

資料：笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2019

【表D-2】学校運動部活動での実施種目(中学生・高校生:上位10種目)

中学生 (n=349)			高校生 (n=231)		
順位	種目	%	順位	種目	%
1	ソフトテニス(軟式)	14.9	1	サッカー	12.1
2	バスケットボール	13.2		バスケットボール	12.1
3	陸上競技	12.3		野球	12.1
4	サッカー	10.6	4	バドミントン	8.7
5	野球	10.0	5	テニス(硬式)	7.8
6	バレーボール	8.6	6	バレーボール	7.4
7	卓球	8.3		陸上競技	7.4
8	バドミントン	6.0	8	卓球	4.8
9	剣道	4.6	9	弓道	4.3
10	テニス(硬式)	3.2	10	剣道	3.0
				ダンス/おどり	3.0

資料：笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2019

(2) 中学生・高校生の運動部活動の状況の推移

表D-3には中学生・高校生の運動部活動の週あたりの活動日数、平日の活動時間、休日の活動時間、土日の活動状況について2017年と2019年の結果を示した。

中学生をみると、週あたりの活動日数は「6日」「7日」の割合が10ポイント以上減少し、「5日」の割合が10ポイント以上増加した。土日の活動状況は「両日」が20ポイント以上減少、「土日のどちらか」が20ポイント近く増加し、ガイドライン制定後の変化がうかがえた。すなわち、

ガイドラインに示された「週あたり2日以上 of 休養日を設ける」を実施する学校の増加が示唆される。

活動時間は、増減は5ポイント以上と大きくはなかったが、平日の活動では「1～2時間」が増加、「3時間以上」が減少していた。休日の活動では「3～4時間」が増加し、「5時間以上」が減少している状況がうかがえた。

このように、中学生の運動部活動においては、ガイドラインに記載された数値に準じた活動を行う学校の増加が示唆された。

【表D-3】 学校運動部の活動状況の推移 (中学生・高校生)

	中学生			高校生			n(%)
	2017年(n=353)	2019年(n=349)	差	2017年(n=229)	2019年(n=231)	差	
週あたりの活動日数							
1日	5 (1.4)	3 (0.9)		3 (1.3)			
2日	3 (0.8)	3 (0.9)		5 (2.2)	6 (2.6)		
3日	7 (2.0)	13 (3.7)		6 (2.6)	14 (6.1)		
4日	20 (5.7)	38 (10.9)	↑	11 (4.8)	15 (6.5)		
5日	80 (22.7)	150 (43.0)	↑	27 (11.8)	47 (20.3)		↑
6日	169 (47.9)	119 (34.1)	↓	117 (51.1)	111 (48.1)		
7日	67 (19.0)	22 (6.3)	↓	60 (26.2)	38 (16.5)		↓
N.A.	2 (0.6)	1 (0.3)					
平均 (日/週)	5.7 (±1.11)	5.2 (±1.01)		5.8 (±1.21)	5.6 (±1.18)		
平日の活動時間							
0時間	1 (0.3)			1 (0.4)			
1～2時間	244 (69.1)	263 (75.4)	↑	104 (45.4)	112 (48.5)		
3～4時間	103 (29.2)	83 (23.8)	↓	116 (50.7)	113 (48.9)		
5時間以上	2 (0.6)	1 (0.3)		7 (3.1)	5 (2.2)		
N.A.	3 (0.8)	2 (0.6)		1 (0.4)	1 (0.4)		
平均 (時間/1回)*	2.3 (±0.67)	2.2 (±0.67)		2.7 (±0.91)	2.6 (±0.79)		
休日の活動時間							
0時間	10 (2.8)	14 (4.0)		8 (3.5)	18 (7.8)		
1～2時間	44 (12.5)	23 (6.6)	↓	14 (6.1)	24 (10.4)		
3～4時間	203 (57.5)	256 (73.4)	↑	126 (55.0)	124 (53.7)		
5時間以上	80 (22.7)	49 (14.0)	↓	68 (29.7)	57 (24.7)		↓
N.A.	16 (4.5)	7 (2.0)		13 (5.7)	8 (3.5)		
平均 (時間/1回)*	3.9 (±1.79)	3.7 (±1.21)		4.3 (±1.87)	4.3 (±2.07)		
土日の活動状況							
両日	161 (45.6)	78 (22.3)	↓	123 (53.7)	115 (49.8)		
土日のどちらか	160 (45.3)	250 (71.6)	↑	80 (34.9)	93 (40.3)		↑
活動していない	19 (5.4)	17 (4.9)		15 (6.6)	21 (9.1)		
N.A.	13 (3.7)	4 (1.1)		11 (4.8)	2 (0.9)		

注1) 差:2019年-2017年

注2) ↑↓:10ポイント以上

注3) ↑ ↓:5ポイント以上

*0時間を除く

■:そのカテゴリで最も高い割合の項目

資料: 笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2019

高校生をみると、どの項目においても10ポイント以上の差はみられず、大きな変化はなかった。週あたりの活動日数は「7日」が10ポイント近く減少、土日の活動状況は「土日のどちらか」が5ポイント近く上昇した点が特徴としてあげられ、週1回以上の休養日が確保されつつある状況が確認できる。

以上のように、中学生と高校生の状況をみると、中学生においてはガイドラインに則った運動部活動の運営が多く、学校で行われている状況がうかがえた。スポーツ庁が2018年10月に実施した「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」フォローアップ調査の結果によると、都道府県、政令指定都市の教育委員会では、中学校の休養日の基準、1日の活動時間の基準について「設定あるいは設定予定」との回答が100%となっている。市区町村の教育委員会では、その値は86%と減少する

ものの、中学生についてはガイドラインの基準に基づいた指導が行われていると考えられ、本調査でも同様の傾向がうかがえた。

一方、高校生では国の基準で休養日や活動時間を設定している教育委員会は、都道府県で7割、政令指定都市と市区町村ではそれぞれ6割程度となっている。学校法人では、基準の設定については「検討中」の割合が5割を超え、また「国の基準とは異なる基準」を設定しているところが2割弱みられた。すなわち、私立の高校では、国のガイドラインに基づいた指導や運営とは異なる方針で活動を行う学校が多い状況が示唆された。本調査結果では、学校設置運営の違いによって結果を出すことができないため、詳細については言及できないが、高校全体としては、ガイドライン制定後に大きな変化が生じているとは言い難い。

D-3 種目別にみる活動状況

2017年の種目別活動状況より、活動頻度が多い傾向にあった野球、バスケットボール、サッカー、バレーボールの4種目を取り上げ、中学生・高校生ごとに2017年と2019年の活動状況の変化を検討した。

(1) 中学生

表D-4に示した中学生の週あたりの活動日数をみると、野球のみ2017年と2019年で「6日」の割合が最も高く、変化がみられなかった。他の3種目は、2017年は「6日」が最も高い割合を示していたが、2019年は「5日」が最も高い割合へと変化していた。平均活動日数をみると、バスケットボールのみ変化はみられなかったが、他の3種目については、減少傾向がみられた。特に、野球は2017年では週の活動日数が6日を超えていたが、2019年は5.4日/週であった。

平日の活動時間をみると、どの種目も「1~2時間」が最も多いという結果に変化はみられなかったが、その割合は高くなっていた。特に、野球では20ポイント、サッカーとバレーボールでは14ポイント以上増加していた。平均活動時間では、バスケットボールのみ長くなっていたが、他の3種目は短くなっていた。

休日の活動時間では、野球のみ2017年は「5時間以

上」が6割近くあったものの、2019年では「5時間以上」の割合が10ポイント以上減少し、「3~4時間」の割合が10ポイント以上増加した。それ以外の3種目では、2017年も2019年も「3~4時間」が最も多い割合であったが、2019年ではその値が大きく増加していた。平均活動時間では、4種目全てが短くなっており、特に野球は1.2時間の低下と大きな変化がみられた。しかし、野球とバレーボールについては、平均活動時間が4.5時間/回、4.4時間/回となっているため、国の基準である3時間程度を超える活動を行う学校がまだ存在している状況がうかがえる。

土日の活動状況は、4種目とも2017年は「両日」が最も高い割合であったが、2019年は「土日のどちらか」が最も高い割合となった。

このように、4種目の結果を比較すると、週あたりの活動日数は5日程度となり、土日の活動も「土日のどちらか」となっており、平日の1日、土日の1日を休養日と設定する学校が多くなったといえるだろう。しかし、休日の活動時間については「5時間以上」が野球では45%を超え、バレーボールでも30%みられた。種目によっては、まだ長時間の活動を行う状況にある。

(2) 高校生

表D-5に示した高校生の週あたりの活動日数をみると、2017年では野球とバスケットボールにおいて「7日」の割合が最も高い値を示していたが、2019年では「6日」の割合が最も高い値となった。また、サッカーやバレーボールでは「5日」の割合も増加している様子がうかがえた。平均活動日数をみると、2017年では4種目とも6日を超えていたが、2019年ではバスケットボールが5.6日/週、バレーボールが5.7日/週と、それぞれ6日を切る値となった。

平日の活動時間は、サッカーで「1～2時間」が7割近くに増加し、バレーボールでも「1～2時間」の割合が増加していた。野球では「5時間以上」の回答がなくなり、大きく変化した。平均活動時間は、野球のみ2017年同様3時間を超えていた。

休日の活動時間は、サッカーで「1～2時間」の割合が大きく増加した。バスケットボールとバレーボールでは、「3～4時間」の割合が増加し、「5時間以上」の割合が減少していることが明らかとなった。野球では、2017年は「5時間以上」が100%であったが、2019年では82.1%

【表D-4】中学生の種目別活動状況の推移(4種目)

n(%)

	サッカー			野球			バスケットボール			バレーボール		
	2017年 (n=45)	2019年 (n=37)	差	2017年 (n=42)	2019年 (n=35)	差	2017年 (n=51)	2019年 (n=46)	差	2017年 (n=35)	2019年 (n=30)	差
週あたりの活動日数												
1日	1 (2.2)	1 (2.7)										
2日	2 (4.4)	1 (2.7)									1 (3.3)	
3日	2 (4.4)	2 (5.4)			1 (2.9)					1 (2.9)	1 (3.3)	
4日		4 (10.8)	↑		3 (8.6)	↑	6 (11.8)		↓	3 (8.6)	4 (13.3)	
5日	8 (17.8)	14 (37.8)	↑	8 (19.0)	14 (40.0)	↑	13 (25.5)	23 (50.0)	↑	6 (17.1)	12 (40.0)	↑
6日	23 (51.1)	11 (29.7)	↓	22 (52.4)	15 (42.9)	↓	19 (37.3)	16 (34.8)		18 (51.4)	7 (23.3)	↓
7日	9 (20.0)	4 (10.8)	↓	12 (28.6)	2 (5.7)	↓	12 (23.5)	7 (15.2)	↓	7 (20.0)	5 (16.7)	
N.A.							1 (2.0)					
平均 (日/週)	5.6 (±1.39)	5.1 (±1.33)		6.1 (±0.69)	5.4 (±0.85)		5.7 (±0.96)	5.7 (±0.74)		5.8 (±0.97)	5.3 (±1.20)	
平日の活動時間												
1～2時間	30 (66.7)	30 (81.1)	↑	24 (57.1)	27 (77.1)	↑	31 (60.8)	30 (65.2)		24 (68.6)	25 (83.3)	↑
3～4時間	14 (31.1)	7 (18.9)	↓	18 (42.9)	8 (22.9)	↓	19 (37.3)	16 (34.8)		9 (25.7)	5 (16.7)	↓
5時間以上	1 (2.2)											
N.A.							1 (2.0)			2 (5.7)		↓
平均 (時間/1回)*	2.3 (±0.74)	2.2 (±0.55)		2.4 (±0.59)	2.3 (±0.51)		2.4 (±0.60)	2.5 (±1.05)		2.2 (±0.71)	2.1 (±0.52)	
休日の活動時間												
0時間	2 (4.4)	2 (5.4)										
1～2時間	5 (11.1)	5 (13.5)		1 (2.4)			3 (5.9)	4 (8.7)		6 (17.1)	1 (3.3)	↓
3～4時間	24 (53.3)	25 (67.6)	↑	15 (35.7)	19 (54.3)	↑	30 (58.8)	41 (89.1)	↑	18 (51.4)	20 (66.7)	↑
5時間以上	8 (17.8)	4 (10.8)	↓	25 (59.5)	16 (45.7)	↓	15 (29.4)	1 (2.2)	↓	9 (25.7)	9 (30.0)	
N.A.	6 (13.3)	1 (2.7)		1 (2.4)			3 (5.9)			2 (5.7)		
平均 (時間/1回)*	3.8 (±1.42)	3.5 (±1.33)		5.7 (±2.17)	4.5 (±1.62)		4.1 (±1.52)	3.5 (±0.84)		4.1 (±1.94)	4.4 (±1.83)	
土日の活動状況												
両日	24 (53.3)	11 (29.7)	↓	30 (71.4)	10 (28.6)	↓	31 (60.8)	17 (37.0)	↓	18 (51.4)	9 (30.0)	↓
土日のどちらか	13 (28.9)	22 (59.5)	↑	11 (26.2)	25 (71.4)	↑	19 (37.3)	29 (63.0)	↑	14 (40.0)	20 (66.7)	↑
活動していない	4 (8.9)	3 (8.1)					1 (2.0)			2 (5.7)		↓
N.A.	4 (8.9)	1 (2.7)		1 (2.4)						1 (2.9)	1 (3.3)	

注1) 2019年-2017年

注2) ↑↓:10ポイント以上

注3) ↑ ↓:5ポイント以上

*0時間を除く

:そのカテゴリーで最も高い割合の項目

資料: 笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2019

と減少し、「3～4時間」の回答もみられた。

平均活動時間は、野球が2017年より減少していたものの、7.3時間/回と7時間を超えていた。バレーボールでは5.0時間/回から4.0時間/回と1.0時間の低下がみられた。

土日の活動状況では、2017年同様、どの種目も「両日」が最も多い割合を示した。野球では、2017年は「両日」が100%であったが、2019年は89.3%と減少した。しかし、それでも9割近くが「両日」活動している状況が明らかとなった。サッカーでも8割以上、バスケットボール

やバレーボールでは6割が「両日」と回答しており、高校生の部活動において、これらの種目ではまだ土日の両日も活動している実態が示された。

【表D-5】 高校生の種目別活動状況の推移(4種目)

n(%)

	サッカー			野球			バスケットボール			バレーボール		
	2017年 (n=22)	2019年 (n=28)	差	2017年 (n=23)	2019年 (n=28)	差	2017年 (n=24)	2019年 (n=28)	差	2017年 (n=23)	2019年 (n=17)	差
週あたりの活動日数												
2日												
3日								1 (3.6)				
4日							1 (4.2)	3 (10.7)	↑	2 (8.7)	2 (11.8)	
5日		3 (10.7)	↑		1 (3.6)		5 (20.8)	7 (25.0)		2 (8.7)	5 (29.4)	↑
6日	16 (72.7)	22 (78.6)	↑	10 (43.5)	16 (57.1)	↑	9 (37.5)	13 (46.4)	↑	13 (56.5)	6 (35.3)	↓
7日	6 (27.3)	3 (10.7)	↓	13 (56.5)	11 (39.3)	↓	9 (37.5)	4 (14.3)	↓	6 (26.1)	4 (23.5)	
平均 (日/週)	6.3 (±0.46)	6.0 (±0.47)		6.6 (±0.51)	6.4 (±0.56)		6.1 (±0.88)	5.6 (±1.00)		6.0 (±0.85)	5.7 (±0.99)	
平日の活動時間												
1～2時間	13 (59.1)	19 (67.9)	↑	4 (17.4)	4 (14.3)		9 (37.5)	10 (35.7)		9 (39.1)	8 (47.1)	↑
3～4時間	9 (40.9)	9 (32.1)	↓	14 (60.9)	24 (85.7)	↑	15 (62.5)	17 (60.7)		14 (60.9)	9 (52.9)	↓
5時間以上				5 (21.7)		↓						
N.A.								1 (3.6)				
平均 (時間/1回)*	2.5 (±0.67)	2.3 (±0.48)		3.4 (±1.12)	3.4 (±0.88)		2.8 (±0.72)	2.6 (±0.63)		2.7 (±0.88)	2.7 (±0.70)	
休日の活動時間												
0時間							2 (8.3)	1 (3.6)		1 (4.3)		
1～2時間	2 (9.1)	6 (21.4)	↑		2 (7.1)	↑	1 (4.2)			1 (4.3)	1 (5.9)	
3～4時間	14 (63.6)	16 (57.1)	↓		3 (10.7)	↑	16 (66.7)	23 (82.1)	↑	6 (26.1)	13 (76.5)	↑
5時間以上	5 (22.7)	6 (21.4)		23 (100.0)	23 (82.1)	↓	5 (20.8)	3 (10.7)	↓	14 (60.9)	3 (17.6)	↓
N.A.	1 (4.5)							1 (3.6)		1 (4.3)		
平均 (時間/1回)*	3.8 (±1.47)	3.6 (±1.62)		7.7 (±1.58)	7.3 (±2.62)		3.8 (±1.07)	3.5 (±0.98)		5.0 (±1.47)	4.0 (±1.50)	
土日の活動状況												
両日	18 (81.8)	23 (82.1)		23 (100.0)	25 (89.3)	↓	15 (62.5)	17 (60.7)		12 (52.2)	10 (58.8)	↑
土日のどちらか	3 (13.6)	5 (17.9)			2 (7.1)	↑	7 (29.2)	10 (35.7)	↑	7 (30.4)	7 (41.2)	↑
活動していない							2 (8.3)		↓	1 (4.3)		
N.A.	1 (4.5)				1 (3.6)			1 (3.6)		3 (13.0)		

注1) 2019年-2017年

注2) ↑↓:10ポイント以上

注3) ↑↓:5ポイント以上

*0時間を除く

■:そのカテゴリーで最も高い割合の項目

資料: 笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2019

D-4 まとめ

本稿では、ガイドライン制定前の2017年とガイドライン制定後の2019年の中学生と高校生の運動部活動の状況を比較した。その結果、中学生においては変化の兆しがみられたものの、高校生においてはほとんど変化がみられなかった。

中学生全体では、週あたりの活動日数において「5日」の割合が増加し、「6日」「7日」の割合が減少した。土日の活動状況では、「両日」が減少し、「土日のどちらか」が増加した。すなわち、ガイドラインに示された「週あたり2日以上以上の休養日を設ける」の内容を実践する学校の増加がうかがえた。

一方、高校生では2017年も2019年も週あたりの活動日数は「6日」の割合が最も多く、土日の活動状況でも「両日」が半数以上となった。すなわち、半数近くの高校では、週6日の活動がガイドライン制定後も変わらず行われている状況が示唆された。

種目別にみると、中学生においては4種目とも変化がみられた。特に野球では、活動日数、練習時間に大きな変化がみられた。また、土日の活動状況は4種目とも「土日のどちらか」を回答した割合が最も高くなり、大きな変

化がみられたと言える。高校生においては、2017年からわずかに変化はみられたものの、ガイドラインの基準から考えると、まだその基準を満たす学校は少ないと思われる。特に、土日の活動状況については、「両日」の割合がどの種目も高く、週あたりの活動日数と合わせて考えると、平日に1日休養日を設けて活動する学校が多いと推察される。

このように、中学校では大きな変化がみられ、ガイドライン制定の効果が一定表れているように思われる。しかしながら、部活動は休みとなっているものの、形を変えて活動する状況も報告されている。なぜガイドラインが制定されたのか、その意味についてスポーツに関わる大人は考える必要があるのではないだろうか。

また、高校生については、日常的な運動部活動の改善だけでなく、日常的な活動の先にある大会の位置付けや大学入試との関係も含めた抜本的な改革を進める必要があるだろう。人生において、高校部活動が頂点になるのではなく、部活動の経験が生涯にわたってスポーツと関わる基盤となるような、長期的な視野に立ったスポーツ活動のあり方が求められるだろう。

<参考文献>

スポーツ庁 (2018) 「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」フォローアップ調査結果

スポーツ庁 (2018) 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン

日本スポーツ協会 (2018) 「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」の背景②, Sport Japan, 38: pp40-41

上毛新聞 (2019) 部活が変わる／休みなく長時間練習…改善するか「週休2日」賛否も

COMMENTS

- 学校の部活動・クラブ活動の時間が短縮されてきているため、休日にゆっくり休養したり、学習との両立がしやすくなってきていると感じます。(13歳女子の母親)
- 障がいのある子なので、普通のスポーツクラブには受け入れてもらえなかった。探せば見つかったが、遠かったり種類が少なかったりとなかなか合うところなかった。指導者がいないことも課題だと思う。みんなのできるクラブや教室が増えるといいと思う。(15歳男子の母親)

資料：笹川スポーツ財団「4～11歳のスポーツライフに関する調査」2019、「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2019